

なのはな通信

No.35 2025.3



2019年11月末に発生した新型コロナウイルス感染症の世界的流行から5年が経過しました、この5年間は、学校も、学生の皆さんも感染対策の徹底が求められる中で、授業や臨地実習の在り方も大きな変化を余儀なくされ、様々な困難とのたたかいのようでありました。私たち教職員は、この新型コロナウイルス感染症を乗り越え、学生の学びを保障していくこと、特に学習内容を維持していけるカリキュラム編成の実施や臨地実習や講師の方々との共同・連携の強化を図り、豊かな学校生活のための学びの機会を最大限保障できるよう努力してきました。その中で、学生の皆さんは時間を惜しむかのように意欲的に、そして積極的に学びに向かい、逞しく大きく成長しました。

「3年間の学習で大切にしてきた、患者さんの人生や思いに向き合う看護の重要性を確信し医療者は患者さんの回復を応援し、一人の人間としての尊重する必要がある。誰もが持つ人権を護れる看護師になりたい。」「社会の一員として政治のあり方に疑問や意見を持ち積極的に社会参加をしていかなければならない。自分も声を上げ、訴えていく」卒論発表で述べられた3年生のレポートの一部です。学生は、学校

での学びと臨地実習で、必死に生き抜こうとする人間の力強さ、人間の回復力のすばらしさを実感し、社会や平和と人権そして医療者の役割にもしっかり目を向け、人としての成長も遂げています。三年間の学びの集大成であるこの機会は学生の大きな成長を実感する時でもあります。こういった学生の学びを支えているのは、民主的で経験豊かな多くの教育実践者の方々の惜しみない応援や民医連の事業所が地域住民の皆さんと共に歩んだ医療活動の歴史と実践が学生たちに豊かなフィールドとして提供され、教育力として学生の成長に大きな役割を果たしているからであることを機会あるたびごとに痛感しています。



校長 窪倉 みさ江

本校は1995年の創立から30周年を迎えました。改めて、本校の教育理念や教育方針の基本に立ち、日々の教育実践を振り返りながら、社会・教育の状況をきっちりと見極める力をつけ、学生・若者を励まし、共に学び、看護学校としての社会的役割を担っていきたくと思います。

学生と 共に歩んだ一年

1年生

30期生

担任

中川千和子

富田智恵

治田美穂



29回 ナーシングセレモニー

4月、入学してすぐ「地域の人の生の声を聞き、人生・健康・医療について学び、保健・医療に対する要求をとらえ、看護について考える」目的で地域交流研修を行いました。

戦争を経験されているB氏は「戦争は人を変えてしまうものだから、平和であることが一番よ。戦争は人間の心が忘れちゃうみたいに人が変わってしまうのね。平和が続くのが一番だから、これからも平和を続けるために頑張してほしいと思っている。」と話してくださいました。B氏や原爆を経験した方の戦争体験から今までの生活や

人の命が一瞬で奪われていた事実、平和への思いを聞き、争いがなく平和であることがどれだけ大切か知りました。自分のやりたいことができている今の生活が当たり前ではないと感じました。私たちが戦争体験の話を引き継いでいき、戦争を二度と起こさないためにも憲法九条を守っていくこと、過去を知り理解することは未来を作ることにつながると考えました。

5月、活動・休息の授業では、車椅子で公共交通機関や施設などを利用し、体験してきました。私たちの生活には欠かせないコンビニ、スーパー、金融機関でも、幅の狭い通路や商品に手の届かない場所があると感じる事



交流研修会 レクで仲良くなりました



観察・計測演習



生命活動 骨代謝の説明頑張りました

が多く、車椅子を利用していても、していなくても、自由に移動ができる権利が保障される社会である事が必要だと感じました。

9月の基礎Ⅰ実習で、80歳代後半のC氏を受け持ちました。C氏は、2年前の転倒をきっかけにパーキンソン病が分かりました。C氏と夫は息子さんの支えもあり自宅で生活していましたが、介護が困難となり夫と2人で入院となった方でした。車椅子で夫に会いに行く前に整容を提案すると、洗面所に行き手櫛で髪を梳かし、寝衣を整えていました。その時のC氏は、とても穏やかな笑顔でした。面会するとおふたりは互いに手を伸ばし再会を喜ばれていました。「会えてよかった。また会いたい」と話していました。C氏は、自身で移動することが困難で、オムツで排泄をしていました。C氏から「トイレに行きたい」という訴えがあり、2人の介助でトイレで排尿をしました。「やっぱりトイレでするのがいい」と話してくださいました。

C氏の願いは、「早く元気になって人の手を借りないようにしたい」「歩きたい」と捉えました。できるだけ自分でやりたいと、自分のできることを少しずつでも行っていくC氏の姿はとても輝いており、生きようとしている力を感じました。そしてC氏の願いを応援したいと思いました。C氏は「自分の身体を大事にしてください。あなたたちは困っている人達を助ける仕事をしていてすごい。頑張ってください。」と話してくださいました。それは戦争の大変な状況の中で育ち人の命の重さを知っているからこそ紡ぎだされる言葉であると感じました。患者さんを1人の人間として捉え、その人の生き方や大切にしていることを知り、願いに近づけるように一緒に考え続けていく看護師になりたいと思いました。

11月のナーシングセレモニーでは決意表明を行い、これからの決意を手話を交えた合唱と動画と共に発表しました。12月の生命活動では、8つの系に分かれ自分たちで文献の読

み合わせや調べたりして学びを深めていきました。呼吸器では酸素がどこから来たのかを疑問に思い地球が誕生する前から調べていき、魚から陸で呼吸できる生物にまで進化した過程が、肋骨と肺と横隔膜を獲得して呼吸の仕組みを整えていったことが分かりました。今私たちが生きていられるということは1つの系だけでなく全身の組織が連携していることで恒常性を保っていることが分かり、生命について考え、自分をもっと大切にしていきたいと思いました。

4月の交流研修から振り返り、これまでの学びが今に繋がっていることを改めて感じます。患者さんの背景をありのまま捉えることを学んできました。患者さんに「何かをしてあげる」という意識ではなく、1人の人間として対等な立場であることを忘れずに、願いや要求を捉えることを大切にします。私たち30期生は患者さんの人権を守るためにこれからも学び続けていきます。

学生と 共に歩んだ一年

2年生

29期生

担任

戸澤亜矢

大井涼



2年生集合写真

在宅看護論実習で80歳代女性のAさんを受けもたせていただきました。Aさんは認知症の診断を受け7年前が経っていました。時間の経過とともに症状の進行から外来通院は困難となり、往診、訪問看護、通所リハビリを利用し、夫の献身的な支えにより自宅で生活していました。

自宅には、階段や廊下、リビングに数えきれないほどの本が積み重ねられていました。Aさんは言語の表現が困難な様子でしたが、笑顔で迎え入れてくださいました。初回の訪問では、夫は学生たちに「主役は看

護する側でなく、看護される側でなくてはならない。自分の思いを主張するのはいいが、話すスピードや伝える手段を、認知症患者それぞれにあった方法でなければ伝わらない。そのため、沢山Aさんと話、触って寄ってきてください」と話してくださいました。そして、学生たちに「新聞や本は読みますか?」と問いました。Aさんがもし転倒し骨折したら、病院は受け入れてくれるのか。身体拘束せざるを得ないのではないのか。病院にしっかりとした体制はあるのか。寝たきりになりなってしまうのかと。病院や地域に

は、病気を治すだけでなく、ケアが必要だと。今社会は競争社会となり、教育・医療・介護や環境も崩壊している。儲けばかりの社会になってしまった。国民一人一人が社会の状況を知り、様々な角度から視て知る。そこから意見を主張する必要があると話してくださいました。

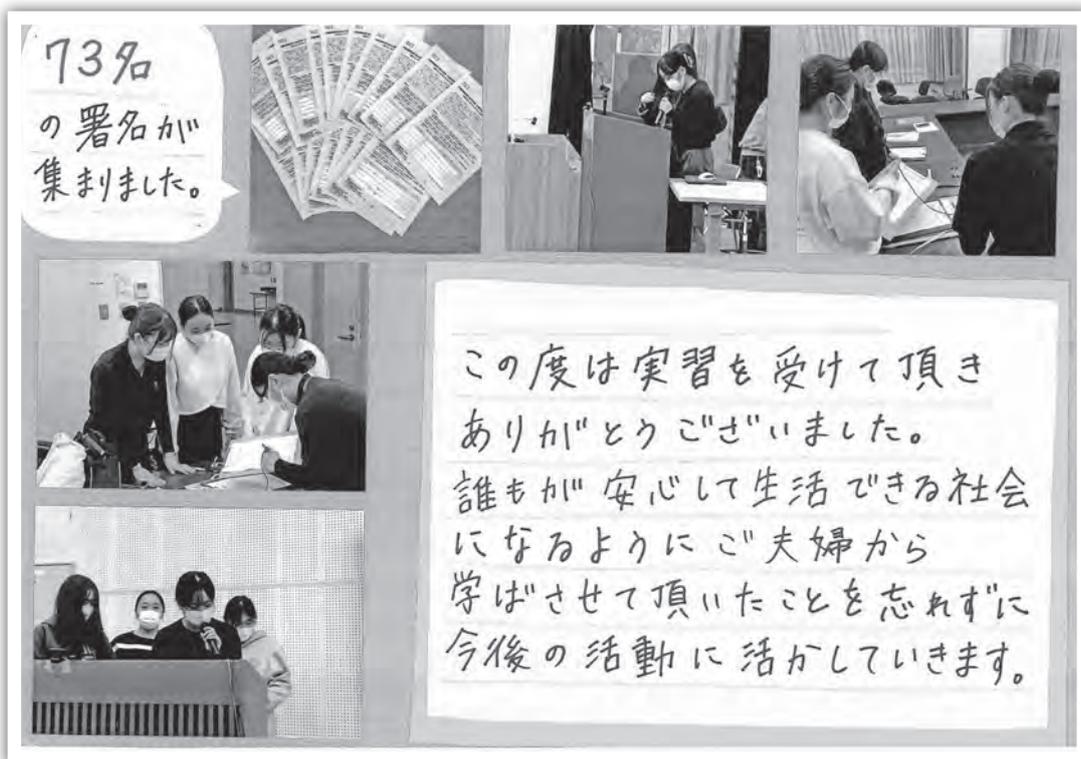
学生と共に、Aさん夫婦の願い・要求は何かを捉えていく中で、「安心して自宅で生活し続けたい」ということがわかっていきました。しかし、寝る時間が長くなってきているAさんの転倒・骨折の心配や、夫の年齢からいつまで介護できる

のか、施設は安心して預けられないという思いがあることもわかっていきました。これらの願い・要求から、Aさんの病態と、安心して預けられないという思いの背景にはどのような事実があるのかを学習していきました。学習するなかで、認知症の進行による活動量の低下や高齢者の身体的変化や特徴などから廃用が進行していくことや、診療報酬の改定から介護報酬の2～3%（訪問介護）の引き下げや、人手不足の実態、燃料費・介護用品の価格高騰、ケアプラン有料化、要介護1・2のサービス保険給付外しの検討がされていること、介護事業所の倒産から、地域でも安心して暮らせなくなっている事実をなどの現状がわかっていきました。その上で、自分たちに何ができるのかを考え、身体機能、認知機能の維持のために、実習が終わっても自宅で継続して行えるよう、学生たちは体操の動画を作成しました。動画には、Aさんが指導者をされるほど大切にしていた趣味である三味線のBGMを付けましたそして、安心して生活して

いけるために何ができるのかと共に考えた末、介護保険制度の抜本的改善と介護従事者の処遇改善を求める署名活動を実践することとなり、校内で全校の学生に呼びかけました。合計73名の署名を集めることができました。そして、体操の動画と、学生たちが集めた署名と署名活動の様子の写真を付けたAさんご夫婦へのメッセージを作成しました。動画を見ていただくと「おーすごいね」と夫も動画をみながら一緒に深呼吸をされました。すると、Aさんも手を動かし夫の様子を見ていました。実習終了後夫より「中々素敵な動画です！！ゆっくり練習していきます！！ありがとうございました！！」と連絡が届きました。署名活動の様子と報告を乗せたメッセージでは「若い人でもこんなに勉強しているんだ。

家族とケアマネに自慢するよ」と大変うれしそうな表情で話していただきました。そして最後に、22歳の看護師が自殺したことを話してくれ、「どんなことがあっても誰かに相談すること」「僕たちがまだいるならいつでも家に来てください。社会全体でお互いがケアしていかないとね」と私たちに言葉をくださいました。

学生たちはこの実習で、私たちは、疾患だけでなく医療の現状にも目を向け、自分の意見を持つためには、現状を学んでいくことが大切であり、学び続け声を広げていくことは、患者や利用者、その家族が安心できる介護・医療につながり、健康で文化的な生活を営むことにつながり、看護師を目指す私たちにとって大切なことであると学びました。



学生と 共に歩んだ一年

3年生

28期生

担任

白倉智美
生田知歩
高田澄子



3年生集合写真

10月、3年間の最後の実習でもあり、集大成でもある総合実習を行いました。大腿骨骨折で入院した100歳代の患者さんを受け持たせていただきました。寝たきりは嫌、と髄内釘固定術を希望され「元気にならなくちゃ」と日々のリハビリを頑張り、実習最終日には歩行器で10m歩けるようになりました。受け持ち1週目の患者さんは、膀胱留置カテーテルが挿入され、抑制着や夜間ミトンを着用していました。リハビリ以外の時間はベッドで横になっていることが多く、食事もベッド上で摂られていました。深部静脈血栓症予防のために足の運動を行い、受け持ち2日目からは車椅子に座って食事を食べてもら

うようにしました。こぼすこともなく食べられている様子から、日頃着けていたエプロンも外すようにしました。患者さんの受け答えの口調が強いことがあり、難聴のために医療者の声が聞き取れず不安や苦痛を感じているのだと捉え、話す音量や話し方を色々とし、患者さんに聞こえるように丁寧に説明するようにしていました。夜間に抑制を

されたことを次の日に「手錠をはめられた」と涙を流して話されていました。トイレでの排泄を検討してもらい、膀胱留置カテーテルが抜去され、抑制着もやめることができました。鏡の前で顔を拭き、歯を磨き、髪をとかしてから1日はじまるようにし、お手玉を持っていくと「昔はよくやったよ。親が作ってくれた。」と幼少期の話や家



卒論ゼミ



ヌチドゥ宝の家



辺野古

族との思い出をいきいきと語ってくれる様子がありました。それまでに見られていた怒りだす様子や落ち着かない様子はなくなり穏やかに過ごされるようになりました。学生は、抑制されていることによる身体的な苦痛に加え、自身の要求が伝わらないことや叶わないことによる苦痛が健康回復に大きく影響を与えていると学んでいました。学生は患者さんに合わせた話し方で丁寧に関わり、患者さんの要求を聞き、穏やかに過ごせるように応援していきました。転倒しないように身体拘束をされていることで、動けない状況となり、患者さんの動作は制限され自由が奪われます。どうしてこのようなことをされるのか理解できなくても、拘束された事実はしっかりと記憶に残るため、強い苦痛として患者さんを傷つけ、尊厳を奪っているのだと、患者さんから学ばされました。そして、学生の実践から何歳になっても看護の力で患者さんが回復していくことを実感しました。身体拘束が行われ続ける背

景には医療体制や診療報酬制度が影響していることを知り、「身体拘束をしないと患者さんの健康は守れないのか」というテーマで卒論研究をすすめていきました。人員不足を理由に身体拘束を行うことは避けなければならなりません、少ない人数の中で看護師の自己努力だけで身体拘束を減らすには限界があります。診療報酬制度の問題点や医療費の削減、自助を基本とする社会保障制度の切り捨てが身体拘束がなくなる背景にあることを学び、日本は社会保障の役割が果たせていないと学んでいます。他のグループは、業務に追われる看護師を実習中に目の当たりにし、看護師不足を研究テーマにしました。歴史から学んでいくと、看護師の低賃金や重労働は改善されていないことが分かっていきました。認知機能の低下からサービス付き高齢者向け住宅から受け入れを断られてしまい、高額な費用が必要な有料老人ホームに退院することになった患者さんを受け持ち、認知症の方が暮らしやす

い社会とはどういうものなのかを研究テーマにしたグループもありました。90歳代の1人暮らしの患者さんを受け持ち、その生活実態を通して高齢者の人権が護られているのか、高齢の透析患者さんは透析をしながら地域で生活を送ることは困難なのか、看護とはなにか、ケアとはなにか、をテーマに学んでいきました。どのグループも、健康に生きる権利は新自由主義政策によって脅かされていること、目の前に起きている事だけをみては患者さんも自分達の健康も護られないこと、困難を抱える人たちが運動してきたことで社会を変えてきたことを学び、1人1人の人権が護られる社会を実現するために闘い、仲間を増やし、誰もが自分らしく生きることが護られる社会をつくっていきたくて決意していました。看護の知識や技術の中核に人権が護られる看護を学び、大きく成長した学生達に、誇らしさと頼もしさを感じました。

研修旅行



今回私たちは、「日本国憲法と平和と医療」をテーマに「平和とともに生存する権利」の大切さを学ぶために4日間の沖縄研修旅行に行きました。

事前学習では、辺野古基地の建設反対運動についてのDVDを観たり、戦争の歴史や加害の歴史について学びを深めました。実際に現地に行くと基地の中に沖縄があるのか沖縄の中に基地があるのかわからないほど米軍のものになってしまっている現状やオスプレイなどの米軍機の騒音は113～120dBで想像以上に大きく、恐怖を感じるほどでした。その他にも米軍機の墜落事故など沖縄県に住み生活をしているだけで常に危険と隣り合わせであると思うと、怖く安心して住むことができないと思いました。

また、ヘリパットの建設が進められていることを知ったと同時に建設は海への影響がありました。その海には250種類の絶滅危惧種やサン

ゴがいて生態系が崩れ沖縄の環境が崩れてしまっていることをお話の中で知りました。自由行動で沖縄の海の綺麗さ、自然あふれる環境を実際に目の当たりにしこの環境をなくしていけないという気持ちになりました。

研修旅行の中で特に印象に残っているのが、ひめゆり学徒隊の資料館でした。患者の対応は生徒の仕事であり、お腹が空いて暴れる人、蛆虫が湧いて捕ってくれと叫ぶ人、脳症で幻覚が見える人、喉が渇いて尿を飲む人、傷口の膿の匂いなどで悪臭であったと知りました。亡くなった生徒一人一人の写真にはどんな性格だったか、死因などが記載されていました。私たちと同じ学生であり、戦場に行き知識もない状態で真っ暗闇の中治療をし続けていたことを想像すると辛い気持ちになりました。

戦争体験者の謝花さんのお話では、何度も「自分たちの税金が何に使わ



れているのか、政治に関心を持ち、学び、知る努力をしてほしい」「平和の武器は学習」「戦争は人が作り、人が殺し合う、止められないことはないと思う」と仰っていました。実際に戦争を体験した方の言葉は重く心に残り、今は発言することも学ぶことも許されている時代だからこそ、これからのために学んでいく必要があると考えました。沖縄で起きた事実は他人事ではなく、自分の問題として捉え考えていく必要があると考えました。また、戦争は人権と相反すると学び、人間の生命を守っていく医療者として平和で武器のない社会、軍事費よりも医療や福祉が充実する時代を作るために選挙に行くこと、戦争の事実をありのままに伝えていく必要があると決意しました。



(28期生 研修旅行委員実行委員長 高嶋葵)

第30回 東葛祭



新型コロナウイルス感染症の拡大から4年以上の月日が経ち、2023年からは一般公開を再開していました。今年も無事に東葛祭を開催することが出来て心から嬉しく思います。今年で東葛祭は30周年を迎えました。地域の方々に支えられながら、先輩たちが繋いできた東葛祭の伝統をさらに盛り上げていけるよう実行委員をはじめする大きな組織として4月から念入りに

会議を行い、休み時間や放課後を使いながら活動してきました。

今年のテーマは「笑顔満祭～未来へ繋ごう笑顔と健康～」でした。2024年も沢山の出来事がありました。石川県能登での震度7の巨大地震と津波、旧優生保護法の憲法違反と初めての判決が確定されました。ロシア・ウクライナ戦争では3年の月日が経ち、社会の問題がある中で、私たちはこの問題に向き合い、国民の一人として社会情勢を視野に差別のない健康で平和な社会を目指し続けていく必要がある。そういった思いを込めてこのテーマを考えました。東葛祭



1日目は各学年が学校生活で学んだ内容を発表し合い全校で学びの共有を行いました。1年生は入学してから約半年間でしたが、患者さんをありのままに捉えるという初心の気持ちが思い出された発表で日々の懸命な学びを感じさせられました。2年生は昨年の発表から格段と成長が見られ、生命活動の理解がより深まった発表で自分達の学習理解にも繋げられました。そし

て3年生は各論を終え、3年間の学びから1,2年生に伝えたいことは何か考えました。精神看護学実習で学習した障がいの有無ではなく誰もが人間として平等であり尊厳がある。人権が保障され、護られなければならないと共有しました。

さらに午後は飯田あきるさんを講師に迎え、性の多様性と人権について講演していただきました。事前に学校全体でどんな学びを深めたいのか話し合い、看護師を目指す中でより人間らしく生きることや、性の多様性について学びを深めたいという声が多く今回依頼させて頂きました。一人一人は個として生き

ており、人間としての自由や安心して自分らしく生きていける社会を広げていけるように関心を持つこと、声を上げる事の大切さを感じた時間でした。質疑応答では沢山の学生が積極的に質問や感想を伝えており、学びを深める事が出来ました。2日目は各学年が協力し合い、去年の課題を踏まえて引き続き、食事処や縁日、お化け屋敷、看護ブース、小林さん写真展に加えて、今年は野田一民展や手作りパン屋のマンマミーア、さらに有志発表もあり、皆の協力で大盛況をおさめることが出来ました。そして後夜祭では恒例のビンゴ大会だけでなく宝探しを企画しさらに学校全体が笑顔で染まった時間となりました。その後の振り返りでは一人一人が主役として参加し、輝きのある時間になりました。来年も新しい風が吹く期待を感じており、学びと笑顔溢れる東葛祭を創って欲しいと思います。

(東葛祭実行委員長 千羽美桜)



平和ゼミナール

今年は被爆79周年。平和ゼミナールの学生たちは、学習会を重ね、事業所をまわってカンパを訴え、校内でも軽食販売を行い、原水爆禁止世界大会 in 広島に7名の学生と教員1名で参加することができました。

学生の感想を紹介します。○平和記念資料館で、たった3メートルの爆弾が14万人の死者を出したこと、またその被害が自分が想像していた以上に壮絶だったことを知り、言葉が出なかった。原水禁大会では、平和な世界を目指して声を上げ、活動し続ける人が、こんなにも多くいることに驚いた。自分たちも、今回、行って終わりではなく、多くの人に伝えていくことが大事なのだ、身をもって感じた。○資料館で、原爆の火傷で苦しみ続けた人々、子ども達の遺品、その後も続く放射能汚染の健康被害、粗末な医療体制などを見た。亡くなくても苦しむ、生き残っても苦しむ、人として死ねず、生きることもできない、戦争の惨さを思い知った。大会の分科会では、戦争を無くす為に軍事同盟を無くさなければいけないと学んだ。もう戦争は起こしてはいけないと強く思った。この経験を大切に、政治にしっかりと目を向け、戦争のない世界になるよう働きかけたいと思った。○昨年に続き、2度目の参加。昨年は話を聞くので精一杯だった。核兵器禁止条約を推進する政府代表と市民の交流の分科会に参加し、唯一の

被爆国である日本がなぜ、いまだ核保有国の傘下にいるのか、締約国会議にオブザーパーとしての参加すらしないのか疑問に思った。看護学生として学びを深めていくこと、多くの人に伝えることが大事だと感じた。○分科会で学んだことは、日本はアメリカと軍事同盟を結んでいる状態であり、軍事同盟が連鎖することは平和への道を遠くさせていると感じた。唯一の被爆国である日本が、アメリカの核の傘下にいる現在の状況は、あってはならない。日本が核締約国会議のオブザーパー参加すらしていない事に、残念に思う各国の気持ちも感じた。今回、行った広島は、きれいな街並みで、私たちが歩いた道も79年前には一発の原子爆弾で焼け野原となり、一瞬にして多くのものが無くなってしまったのだとは、とても想像できないほどだった。平和を考えるためには、知らない過去のことに興味を持ち、原子爆弾や戦争に関する学びを通して、その恐ろしさや原爆のことを、知らない人に伝えていくことと、私たちが平和について考えて続けていくことが大切であると再度、思った。○私は職員として初めての原水禁大会参加でした。学生たちが、資料館での展示物の衝撃に座り込んでしまったり、意気込んで分科会に参加したものの話が難しく、それでも一



生懸命に学ぶ姿、仲間との旅を心から満喫する様子に、このかけがえない日常を決して手放してはならないと思いを新たにしました。看護士、そして看護士学生の私たちの手は、平和を護り、人権を護り、その体が持つ健康に生きようとする力を応援するためにあります。決して戦争協力をする手にしてはならない、命が蔑ろにされることを許してはならない、世界の平和を求めて仲間と共に闘い続けたいと思いました。

今回、卒業生、事業所、地域の方々からの多大なご声援、ご支援、ご協力を頂き、原水禁大会に学生と教員で参加することができ、またその学びを全校で共有する、平和の集いと東葛祭での展示発表も行うことが出来ました。本当に、ありがとうございました。



27期自治会活動

—学生自治会の取り組み—



2024年1月1日に起きた能登半島地震で、多くの方が被災したことに心を痛めているだけではなく中で、本校も、看護学生として出来ることをしようと立ち上がった学生自治会りました。自治会の呼びかけで、全校で能登被災の現状をDVDで学び、義援金を集めることを決定しました。

まずは学校内で、学生・講師・教職員へ訴えました。次に、卒業式の参列者の皆様へお願いをしました。卒業生保護者の皆さま、そして来賓の皆さま多くの皆さまにご協力を頂くことが出来ました。3月14日、いざ学校外へ。場所は、流山おおたかの森駅構内、駅周辺のバス乗り場、ショッ

ピングセンターの広場の3か所。学生自治会が初めて取り組む学校外活動で、マイクを持つまで少し躊躇しましたが、90分間「能登支援への募金活動にご協力をお願いしますから!!!」と第一声を発してからは、90分間止まることなく訴え続けました。足早に見向きもせず足場や走り去る群衆のなか中で、振り返って足を止めてくれる方、100円玉を握りしめて行ったり来たりしてやっと意を決し渡してくれた小学生。「石川のためにありがとうございます」とお礼を言って下さった親子、多くの方が協力してくれました。1時間半で10万円を超えた募金

は、私たちの声に応えてくれた社会への信頼、そして自分たちにもできやれたという自己への信頼へとつながっていきました。流山おおたかの森駅で協力いただいた募金額は、約110,000円。学内での募金額も含めると合計161,027円で、石川民医連に送付させていただきました。

思いを実現させるために行動することが大切であることを身体いっばいに感じた時間でした。そして、市民の多くの皆さんが同じ思いであったことを感じ、連帯することの大切さも実感しました。能登半島で苦しんでおられる方々に思いを寄せて行動したことは、看護師として人間としてどう生きるかを学ぶ場になりました。場になったと思います。

私は、学生たちの正義感に溢れた行動に感動と深い信頼を感じた時間でした。(山田かおる)



28期学生自治会役員紹介



2024年12月12日に行われた政府交渉に役員代表が学生の声をビデオメッセージを送りました。

30周年記念公開座談会

臨床指導者研修会

テーマ「開校から30年を振り返り、後継者育成について学び発展させよう」

副校長 山田かおる

2024年8月9日(金)9時30分～12時00分、臨床指導者、看護管理者、地域の方々67名に参加いただき開催しました。

座談会のパネリストは、東葛看護専門学校開校時の1科教務主任 石倉啓子先生、2科教務主任久保知代恵先生、元東葛病院総看護師長 矢幅操さん、元船橋二和病院副総看護師長 小谷英子さん、東葛健康友の会会長 江口正博さん。コーディネーターは当看護学校校長 窪倉みさ江先生です。

5名のパネリストの皆さんからは、それぞれの立場から東葛看護専門学校が設立されるまでの住民運動の実践、何を大切に看護教育を実践されてきたのか、さらに臨地実習病院としてどのように受け入れの準備をして臨地実習を行ってきたのかについて語っていただきました。

久保知代恵先生は、日本国憲法と(旧)教育基本法に立脚した看護教育を目指して学校開設し、教育実践をされたことを話して下さいました。(旧)教育基本法にそって本校での教育実践の意義を話していただき、夢をもって自主カリキュラムを組み教育実践をしてきたこと、そこには連帯があったことを聞きました。たくさんの方々情熱でこの学校が建設されたこと、その思いを受け継いでいく決意を新たにしながらお聞きしました。

石倉啓子先生は、東葛看護専門学校に目指すべき看護教育があると山梨県から希望をもって東葛看護専門学校に着任した歴史が語られました。

そして、「民主的で豊かな社会の形成者として成長する看護師養成」という、本来の教育のあるべき姿を追求していった看護教育であったこと。数ある学校のなかで東葛看護専門学校を選んでくれた学生たちを無条件に愛し、その成長に尊敬をして教育に携わってきたことを語っていただき、参加者の胸を打ちました。

矢幅操さんからは、「学校・臨床が共同して取り組んできた看護師養成の意義を振り返る」と題して、1995年看護学校の開設時の、学生を受け入れるための経緯と準備について話しをしていただきました。日本国憲法と民医連綱領を土台にした看護実践に取り組んできたこと、臨床実習を受け入れることは臨床看護の質的向上を追及につながることが語られました。臨床と学校が共に、看護の発展に希望をもって臨床実習の受け入れが始まったことを実感しました。

小谷英子さんからは、「学校・臨床が共同して取り組んできた看護師養成の意義」と題して、実習受け入れまでの道のりを丁寧に語っていただきました。臨地実習受け入れにあたり、病院そして看護部全体にその意義を浸透させたこと、学生の休憩室・カンファレンス室を確保としたこと。さらに、指導にあたる臨床指導者の育成を看護集団で取り組んでこと。そして、準備は必死であったが「学生と一緒に看護を発展させる夢や希望があった」こと話され、臨床実習をとおして皆で後継者を育成していった看護部の強い思いを感じました。

最後に江口正博さんからは、「地域と民医連の希望の星—東葛看護専門学校の一層の奮闘を願って—」と題し、「東葛地域の看護学校設立」請願運動から話が始まりました。東葛地域の医師会長・県看護協会会長・日本看護協会千葉県支部長・町内会・老人会・労働込み合いなどが賛同し、5万4000余の署名が集まり、県議会全回一致で採択されて、野田市に建立の看護学校が建設されて、流山市に東葛看護専門学校が設立された歴史を知りました。そして、今も友の会会員・地域住民の皆さんは、地域の看護体制の充実に貢献し民医連運動の後継者育成をしていく地域の共有財産として見守り、協力支援してきたことも話して下さいました。

加者の感想には、「東葛看護専門学校が地域の皆さんの大きな期待で建設されたことを知りました。」「これからも東葛看護専門学校を大切にしていけることが大事と思いました。自分自身は卒業生ですが、こんなにも愛されて育てていただいたということに感動し、これから頑張っていくと思います。」「臨床実習を受けることは、学生さんたちの気づきから私たちが学ばされるのがたくさんあります。これからも、学生さんたちの臨床実習が大事に、ともに歩んでいきたいと思います。」「5名のパネリストの皆さんの話は参加者にとって、感動と今後への希望を紡ぐものになりました。30周年目を迎え、この学校の灯を灯し続けていきたいと決意を新たにしました時間となりました。」

2024年度 雑誌掲載報告

医学書院 「看護教育」
第65 第3号 2024年6月25日発行
特集『誰一人取り残さない看護教育を目指して』
学び合い育ち合う教育を目指して「学生が主人公」の教育実践
副校長 山田かおる 著

日本看護協会出版 「コミュニティケア」
2024年10月号
(342号, Vol.26, No.10)
〈報告3〉地域社会の実態から学ぶ
密着型「地域フィールド」学習
校長 窪倉みさ江 著

メヂカルフレンド社 「看護展望」
2024年12月号
(Vol.49, No.14)
研修会完全レポート
看護師等養成所におけるハラスメント防止
副校長 山田かおる 著

*その他 全日本民医連、東京民医連の各会報に本校を取り上げていただきました。

高等教育無償化を求め政府交渉

2024年12月12日、勤医会東葛看護専門学校(片山輝彦・児玉宏行)、全日本民主医療機関連合会(宮川喜与美・西村峰子)、共産(倉林明子・吉良よし子)及びWebで勤医協札幌看護専門学校・公立高等看護学院・近畿高等看護専門学校・泉州看護専門学校・ソワニ工看護専門学校・健和看護学院や民医連職員が参加「高等教育無償化」「修学支援制度改善と看護師養成校・看護学生への支援拡充」を求め政府交渉を

行い、さらに2024年5月28日にも「高等教育無償化と、経済的不安なく看護職を目指す環境整備を求める請願書」「高等教育無償化を求める署名(115,420筆)」「看護師処遇改善を求める署名(219,800筆)」を文科省と厚労省に提出、1.国際条約である「高等教育無償化」を速やかに履行すること、

2.給付型奨学金の拡充と要件緩和、看護職を目指す全ての学生が利用できる制度にすること。3.看護職養成校への国の補助金充実を求め要請を行っています。



文科省・厚労省に要請書を提出2024年12月12日参議院会館

この希望の星たちの願いは、きっと叶うと信じています!



私達は、奨学金の返済を背負わなければ高等教育を受けることができないのでしょうか

勤医会東葛看護専門学校 28期学生自治会役員

私は学校事務をしています、学費の支払いが困難な学生の相談が絶えません。学費の事で退学にならないよう、看護の道をあきらめないよ

う、1人1人、丁寧な対応をしています、日本の高すぎる学費が家計に大きいのしかかっている現状があります。学校独自で授業料の延納や分納など、努力していますが、学校経営も大変苦しい状況です。今回、学校の声を直接、国に届けられる機会

ができたことを学生自治会の役員たちに知らせると「それなら是非」と言い「アンケート調査やクラスメイトから聞き取り、看護学生のリアルな

実態、自分たちの生の声を国に届けたい。かたちに残そう!」と動画撮影に臨みました。「高等教育無償化は看護学生だけでなく、全国の学生の願いであると訴えます。誰もが経済的負担なく、学業に専念できる環境を作って欲しいです。高等教育無償化をぜひ実現させていただきたいと思えます」と、学生自治会役員は勇気を振り絞り「学校名を出し」「名前を出し」「顔を出し」切実な願いを訴えました。この希望の星たちの願いは、きっと叶うと信じています。高等教育無償化は絶対に必要です!

全国看護学生アンケート調査 コロナ禍以降さらに深刻

民医連は全国看護学生アンケート調査を4年連続行っています。コロナの影響で、保護者の収入減、倒産、失業やアルバイトが出来なくなる中で、経済困窮に陥る事例が多数寄せられました。全国的な実態を把握するため、2020年からアンケート調査開始。本調査をもとに「学生支援給付金」や「給付型奨学金」の拡充、高等教育無償化をはじめとした、経済的不安なく看護職を目指す学びの環境改善を毎年国に求めています。(2024年度955名回答)

【親からの仕送り】2022年から「仕送り」2万円未満が急増、今回は85.8%まで増加、アルバイトと奨学金に頼らざるを得ない現実が浮き彫りに。

【世帯経済状況】世帯収入270万円未満が最も多く、おおよそ半数が380万円未満と回答。コロナ禍以降(2022年から)仕送りや小遣いなどの親からの援助の金額が大幅に減少し続けています。回答した955人の看護学生の内6割が親からの援助を「受けていない(0円)」と回答。

【本人の経済状況】経済的にゆとりがなく節約しているもの「被服費」「嗜好品」「食費」「交通費」と例年同様でしたが、物価高騰での生活の変化では、圧倒的多数が「節約」「貯金を切り崩し」「アルバイトを増やしている」と回答。

【奨学金】3割が受けていないと回答していますが、受けていない理由

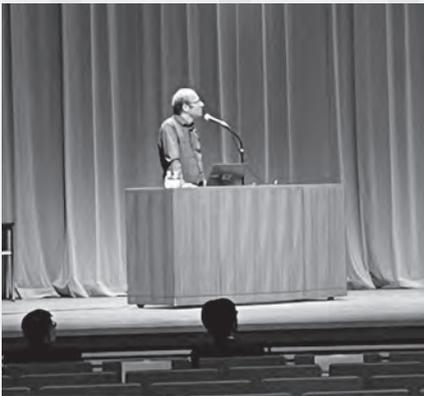
を尋ねたところ「必要だったが受けられなかった」「返済が不安で借りられなかった」が4割以上を占め、実際にはおおよそ9割が奨学金を必要としている結果となりました。【アルバイト】87.6%がアルバイトをしていた。一日のアルバイト時間が4時間～6時間が最も多く、時給の高くなる深夜バイト(22時～翌朝5時)が3割にのぼる実態が明らかとなりました。アルバイトによる睡眠不足や疲労蓄積で学業に支障があると回答した学生はおおよそ7割「命に関わる大切な職業なので、アルバイトではなく勉強に集中したい」という学生の声は強く切実です。

(児玉 宏行)

東葛看護専門学校はこれからも粘り強く学生と学校の切実な声を国に届け続けます。

広島HPH国際カンファレンス参加して

生田知歩



’24年11月上旬、広島で行われたHPH学会へ参加の機会を頂いた。戦争への深い反省と平和教育をカリキュラムの根幹に据える本校の学生が平和をどのように学んでいるか伝えてほしいという依頼だった。

2年生は東葛祭で地域の方から伺った戦争体験を發展させ「自分たちが考える平和とは！逆に平和でない状態とは」を黒板一杯にkey wordを書いて討議・発表した。

討議の契機となった地域の方の話には、次のような内容がある。

ある住民は、「満州から引き上げ時、幼い弟が亡くなり生き延びるため母親が遺体を投げ捨てざるを得なかった」話をしてくれ、ある住民は「軍需工場



で際限なく働かされ、校庭を耕し自力で食べ物を手に入れ、爆撃の度に防空壕へ逃げ、手紙はすべて将校にチェックされた」と話をしてくれた。その後、平和ゼミナールへ11人が入り’23年は5人、’24年は7人原水爆禁止世界大会に参加している。

学生たちが平和を希求し行動していることに、嬉しさでいっぱいになる。80年前、人類は世界で何百・何千万人も命を犠牲にして今がある。地域の方の戦争体験は、自分たちの未来を脅かすものと伝わり行動する契機になっている。

この様子を多くの人へ知らせたいと素直に思う。難題は進行・発言すべて英語！で行われる国際学会ということにある。学校には経験豊富な英語の講師がおり、全面サポートをお願いできた。発表原稿を英訳すると、担当者から文字数でなく1分70単語という驚異的な短さを提示される。オーマイガッ！！短さにおののいている私へ、英語の講師は「わかりました、先生の伝えたいことを短くしてみます！」とあれもこれもとなっていた日本語を、すっきりと英文にしてくれる。

次はスピーチ。

中高看学で学んだ英語は記憶の彼方、先生の読み上げる英文を追って音読するが、先ず息が続かない。活舌がついてこない。加えてイントネーションにアクセント、連続読みを間を置

くところ・・・肯定しながら丁寧に教えてくださるが、メモすら難しく迷って書ききれず・・・そこで先生のお手本スピーチの録音をお願いし、くり返し学習した。

アイホンに録音された先生の発音・間の取り方、一文一文音読練習する。全体5分の文章なのに、なかなか読めるようにならない。コロナ後のかすれ声に内服で対処し、大きな読み違いなくスピーチを終えた。日本語を話せる同様の参加がなかったため、大成功は独りでお祝しいた。

全体会では、リチャードウィルキンソン(イギリス)教授のオンライン講演を同時通訳で聞いた。健康・幸福・格差・不公平の概念がガラガラ崩れる。



『信頼と幸福はつながっている。公害・社会的要素・格差が大きければ大きいほど下の方に影響し、貧困は、相対的に人々が憎みあい、努力が報われない状況にある。家族関係は悪く、学校は恥を強める機関となり、社会的底辺にいとストレスを忘れることができている。ストレスが強まると自分を卑下する傾向になり正当に評価することが難しく、ひきこもりがちになる』という。

『私たちは、貧困に何ができるか考える必要がある』とも話された。目の前にいる学生・患者さんの置かれた状況と重なり、私たちが問われていることを深く認識する機会となる。

カナダトロント大学のギャリーブロック准教授は、15年の活動を振り返り次に何ができるかを話合っている。改革に必要なのは、1. 新人とともに地域に入り周囲に知ってもらい、2. 全国団体の支援を働きかける、3. 貧困への社会支援と労働支援であり、**声のない人はいなく、誰かに黙らされているだけ。**

目の前にいる学生・患者さんたちの声を聞けるひとりでありたい。



新任のご挨拶



片山 輝彦

勤務し、地域医療の現場に携わってまいりました。そうした経験を活かしながら、

2024年11月1日より、勤医会東葛看護専門学校の事務長に就任いたしました片山輝彦と申します。これまで東葛病院や法人内の診療所、そして加盟団体である民医連の事務局員として

本校の発展と学生の皆さんの成長を支えていきたいと考えています。

本校は、「人権を尊重し、地域に根ざした看護の実践を担う人材の育成」を教育理念とし、専門的な知識や技術だけでなく、患者さん一人ひとりに寄り添う心を大切に育てています。私がこれまで関わってきた現場でも、看護師の皆さんが温かい思いやりを持ちながら地域医療を支える姿を何度も目にしてきました。学生の皆さんが安心して学び、看護の道を自信を持って歩んでいけるよう、より良い環境づくりに努めてまいります。

また、本校の特色のひとつに、地域の医

療機関や関係団体との強い連携があります。私自身、医療機関や民医連の事務局で培った経験を活かし、学校教育や臨床実習のさらなる充実を図り、実践的な学びの場をより豊かにしていきたいと考えています。

これからも、学校内外の皆さまと力を合わせ、本校の魅力や使命を広く発信し、学生たちの夢を応援していければと思います。そして、本校がこれからも地域医療に貢献し続ける場であるよう、精一杯努めてまいります。どうぞよろしく願いいたします。

離任の挨拶とメッセージ



児玉 宏行

になりました。異動の説明を受けたとき、学生たちの笑顔・声・姿が浮かび、本当に切なくなりました。自分みんなの力になれたのだろうかと考えました。そこで、この学校に着任した時の、所信表明を読み返しました。

～東葛看護専門学校は本当に素敵な学校です～

2016年7月～2024年10月末まで東葛看護専門学校事務長を勤め、3ヵ月引継ぎを経て、2025年2月より東葛歯科事務長として異動に

みなさんとの出会いを大切に、共に学び、共に成長し、みなさんの学生生活が充実したものになるよう全力でサポートしたいと思っています。短い文書ですが、これが約8年前の所信表明でした。

この時の所信表明と、みなさんへの情熱と安心感を惜しみなく出し続けよう、という気持ちは変わることなく今でも一緒です。特に、コロナ禍は、本当に大変になり、学生や学校を守るため「学生支援緊急給付金」「国家試験追試験」「高等教育無償化」など、学生と学校への緊急支援を求め政府交渉に挑み、マスコミの取材を受け、人のために、情熱いっぱい、全力で取り組み、東葛健康友の会、新婦人の会、東京民医連退

職者の会、東葛学食や地域のみなさんの応援に支えられ、全員で力を合わせ、困難を乗り越えることができ、本当に良かったと思います。忘れられないほど感謝の気持ちでいっぱいです。

東葛看護専門学校入学を目指す受験生のみなさん、看護師を志すみなさん、ご家族のみなさんへ、伝えたいメッセージがあります。

「東葛看護専門学校は本当に素敵な学校です。どうぞ安心して飛び込んで来てください」この学校で働けて、みなさんとお会いして、本当に幸せです。

みなさんとの出会い、かけがえのない一生の宝物です。沢山の思い出と、沢山の感動を、本当にありがとうございました。

ようこそ先輩



落ち込むことがありました。しかし、そんな時に私を救ってくれたのは、患者さんの言

私は現在、東葛病院の6B病棟で実習指導者をしています。そんな私ですが、正直、今まで何度も、できない自分に「看護師は向いてない」と思い、落

葉でした。

2年目の時、全盲の患者さんに「わかってるからね。見てる人は見てるから！」と言われました。直接見ているわけではなくても声でわかる。頑張っている、誰も気づいてくれないと思いつつ、その言葉は私の支えになりました。それから月日が経ち、8年目になった頃、色々やらなければいけないことも増え、押しつぶされそうになっていた私に、「大丈夫？大丈夫だよ！見てる人は見てるから。だから私は優しくするんだよ。大丈夫だからね！」と言ってくれる患者さんが

いました。あの時と同じ言葉に驚きました。私のやってきた看護は間違いじゃなかったんだなと。おかげで、春には10年目になります。

皆さんも、これから、実習や働き始めて色々な事があると思います。しかし、患者さんの声に耳を傾けるのは忘れないようにしてください。患者さんの一番近くで寄り添うことができる看護師、その原点を学生時代は学ばせてもらいました。今の学びもとに、素敵な看護師になってください。実習や現場で会えるのを楽しみにしています。

編集後記

福島原発、震災から13年が経つ。双葉町、浪江町は今でも帰還困難地域である。多くの人が避難生活を余儀なくされた。被災地である楢葉町、富岡町、大熊町には毎日6,000人の作業員が入り出している。復興予算で商業施設を建設する計画だ。低線量と言いつつ車で走っていると線量計の音は次第に高くなっていく。帰還困難者が帰宅できる安心な環境には程

遠い。

国や東電は原発安全神話を国民に刷り込み、震災前から様々な原発事故を隠蔽してきた。事故後「自然の驚異であり、想定外であった」と繰り返した。

双葉町希望の牧場は原発から20Km圏内にある。300頭以上いた牛は今155頭。原発直後多くの牛は殺処分になった。牛飼いの吉沢さんは今でも朝から晩まで一日中世話をし、人間が消えた土地に元気に動き回っている牛とともに

生きていく決心をした。今権力の暴走に歯止めをかけないと民主主義そのものが危機となっているのではないだろうか。

伝言館の石碑には「人々に伝えたい感性を研ぎ澄まし、知恵を振り絞り、力を結び合わせて 不条理に立ち向かう勇気を！科学と命への限りない愛の力で！」避難者訴訟原告団長故早川篤雄さんの言葉は私たちに人権が護られる平和な社会を投げ掛けている。

(高田澄子)

キラリ 学ぶ青春

2024年2月
～2024年9月
小林 功
モノクロ写真展



卒前技術ゼミ



国試 みんな頑張ろう



地域フィールド



卒業式 頑張った3年間



能登半島支援募金活動



オープンキャンパス



夏期臨床指導者
研修公開講座



入学式



東葛祭



勤医会東葛看護専門学校

編集・発行 勤医会東葛看護専門学校
〒270-0174 千葉県流山市下花輪 409 TEL.04-7158-9955 FAX.04-7159-7055
発行責任者 校長 窪倉 みさ江